

④ 黒川の人々

○門笛の人々

19 黒川の春は

かどぶえ
門笛が始まります

20 春日神社の神職たちが

笛を吹きながらししがしら
獅子頭を
持って

氏子の家を一軒ずつ訪ね、
家内安全、無病息災を
祈願します。

○小林家

21 その中に特別な家が
あります。

ここは、

2014年の王祇祭で

下座の当屋を務める

小林繁治さん

小林さんの家です。

		<p>22 当屋を務める人、 つまり^{とうやとうにん}当屋頭人は、 ^{おとなしゅう}大人衆と呼ばれる氏子の 長老たちの中から、 王祇祭の時 一番高齢の人になるという 習わしです。 当屋を終えると 隠居となり、 大人衆を退出します。</p> <p>23 当屋を務めることは 長生きした証しであり、 一生に一度のことなので 大変喜ばしいことですが、 王祇祭で大勢の人たちを もてなすための準備は 大変です。</p>
--	--	---

	<p>○小林義一さん</p> <p>○田植え</p>	<p>そのため、昔から 黒川では、 近隣の人たちが助け合う ごうりき 合力という仕組みが 作られています。</p> <p>小林「昔から合力とって助け合う 形で村中の人たちが来てくれたん ですね。 でも、今はなかなか平日の日中と かは、会社勤めで来れない人が いるけど、 そうやって人の手が必要な時は、 なるべく土日に日程を合わせて やるようにはしている」</p> <p>24 小林さんは専業農家。 およそ2ヘクタールの 米をつくっています。</p>
--	----------------------------	--

	○筍掘り	<p>25 <small>もうそうだけ</small> 孟宗竹の北限に当たる 庄内地方では、 田植えの頃、 竹の子の収穫期を 迎えます。</p>
	○孟宗汁	<p>26 その頃、黒川の人々が 必ず食べる郷土料理が <small>もうそうじる</small> 孟宗汁。</p> <p>27 竹の子とシイタケ、豚肉、 厚揚げを酒粕とお味噌で 煮たものです。</p>
	○上野さん	<p>28 <small>たゆう</small> 下座の太夫、 <small>うえのよしぶ</small> 上野由部さんは 地元の小学校で 能を教えています。</p>

	<p>○クラブ活動</p>	<p>29 上野さんは、 一子相伝 二十代目の下座太夫です。 <small>くしびきひがし</small> 櫛引東小学校の課外活動、 ふるさと芸能クラブは 先代の太夫 上野さんのお父さんが 始めたものです。</p>
	<p>○卒業式</p>	<p>30 先代亡き後、下座の長老が 指導をしてきましたが、 2013年から上野さんが 引き継ぐことになりました。</p> <p>31 というのも、 教員である上野さん 2013年度を以て 教職を定年退職したからです。</p>

	<p>○上野さん</p>	<p>32 生まれながらにして</p> <p>黒川能の世界に育った</p> <p>上野さん。</p> <p>子供の頃はどのような</p> <p>思い出をもっているの</p> <p>でしょうか。</p> <p>上野「私の記憶では5歳ぐらいから稽古をつけてもらったと思います。その前だとうっすらと覚えているのは、とにかく祖父の胡坐かいた中に座ってですね、抱かれながら、祖父は常にもう謡をうたっていますから、その謡を聞いていたという記憶は残っています。もう小学校、中学校の低学年の頃までは、能そのものが日本のいたるところに、もしくはプロというものがあるということさえ知らなかったですかね。</p> <p>ですから黒川にしかないものだとばかり思っていました。それで稽古つけられるのがいやで、高校時代にはとにかくこの世界から逃げ出したいという気持ちの方がかえって大きかった」</p>
--	--------------	--

	<p>○稽古風景</p>	<p>33 上野さんは 高校を卒業すると 黒川を離れ、 東京で大学生活を送ります。</p> <p>34 二度と戻らない 覚悟でしたが、 そこで初めて 伝統芸能としての 黒川能の持つ価値に 気が付きます。 その後、黒川に戻って 教員となり、 40歳の時、父の後を継ぎ 太夫となりました。</p>
	<p>○上野さん</p>	<p>上野「太夫を継ぐためには山ごもり というのをするんですよ。 春日神社の方に、大体1週間、上座 の太夫から伝授されるわけです。 下座の太夫になる人は・・・ それがまた逆であれば、上座の太夫</p>

	<p>になる、変わるという時には、下座の太夫が伝授するようになっていきます。それで教えられるのが、いわゆる式の中で翁をやるわけですけど、いわゆる公儀の翁とって、一般的な翁ですけども、その公儀の翁を伝授されるわけです。その時に様々なことを教えられて、太夫というものはということ、一献交わしながらこんこんと教えられるわけです」</p>
○笛の稽古	<p>35 夏の夕暮れ、</p> <p>笛の稽古に向かう</p> <p>一人の若者がいました。</p> <p><small>さいとうよしひろ</small> 齋藤義弘さんです。</p>
○職場	<p>36 齋藤さんは</p> <p>去年から上座の囃子方として</p> <p>笛の稽古を始めたばかりです。</p>
	<p>37 高校卒業後、</p> <p>一旦、黒川を離れて</p> <p>いましたが、</p>

		<p>結婚を機に帰郷。</p> <p>今は鶴岡の^{すいさんぶつしじょう}水産物市場で働いています。</p> <p>38 帰郷後、昔の仲間から声を掛けられ、思いがけずも囃子方を担当することになったという斎藤さん。</p> <p>今は上座の一員として立派な後継者になることをめざしています。</p> <p>斎藤「基本的なことは教えてくれるんですけど、あとそこから先はもう個人の技術だという扱いになるので、上手くなるならないは個人のセンスとあとは練習次第なんで、仮に本番の舞台上で失敗というか、あまり上手く吹けなくても、別に誰に怒られるということもないし、誰かに注意されるってこともないですけども、ただ自分自身が深く反省して次にのぞむという</p>
○仕事中		
○斎藤さん		

	<p>○稽古</p>	<p>ことなんで、誰か叱ってくれる世界じゃない」</p> <p>39 斎藤さんに笛の手ほどきをしているのは</p> <p><small>あきやまあつし</small> 秋山篤司さんです。</p> <p>秋山さんも斎藤さんと同様に一時黒川を離れていましたが再び戻ってきました。</p> <p>そして、今は上座の囃子方として活躍しています。</p>
	<p>○秋山さん</p>	<p>秋山「これを自分の代で絶やしてしまうと、これはもう二度と復活はできない、これが続いて来たことの意味をちゃんと考えて次に伝えることをしっかり考えてやれ、というような話はよくされていたので、まあ、今、義弘君は家に稽古に来るわけですけど、まさに、今のまったく中とい</p>

		<p>うか、義弘君も次に誰か教えるという部分を、きっと、今はそんな余裕はないでしょうけど、そういうことを頭に入れてということはたまに言っているんですけど」</p>
	○虫干し	<p>40 黒川では、毎年、夏に貴重な文化財である装束^{しょうぞく}や能面の虫干しを行っています。</p>
	○斎藤さん	<p>41 上座の虫干しに立ち合っているのは太夫の斎藤賢一^{さいとうけんいち}さんです。斎藤さんが太夫になったのは2003年です。</p>
	○農作業	<p>42 それ以来、斎藤さんは勤めをやめ、</p>

	<p>○斎藤さん</p> <p>○花火大会</p>	<p>農業をしながら 太夫の任務に 力を注いでいます。</p> <p>43 上座の太夫は、 世襲制ではありませんが、 かつては下座のように 太夫の世襲制が あったのでしょうか。</p> <p>斎藤「わりと上座は続かないんですよね 先代も、その先々代もちょっとまあ 家庭の事情とか様々出て来ましたの で、まあ下座のようにはいかなかった ということで、永く続いたという 家というのは記録にはあまりないの ですが、まあ、最初の頃の斎藤源太 夫という方の、この方の歴史的な文 献もありますけど、まあ、その後、 上座では太夫がなかなか続かなか ったということです」</p>
--	---------------------------	---